

東日本大震災 被災地支援の報告

下田市は、県の要請を受け、これまで9名の職員を岩手県山田町及び大槌町へ派遣しました。想像を絶するような現実に出会った、市職員の体験を報告します。

被災地派遣で感じたこと

上下水道課 黒田幸雄

私が被災地山田町に派遣されたのは被災約1か月後の4月21日から30日の10日間でした。町役場が少し高台にあった山田町は職員の犠牲者が数名、庁舎に大きな被害はなく、町幹部を津波で多数失った隣の大槌町よりずっと復旧は進んでいたようでした。山際にある山田道路（下田でいえば伊豆縦貫道）が無傷で被災直後から使えたことも大きかったと感じました。

私は建設課に派遣され、主に仮設住宅関係の仕事をしてきました。山田町建設課には新築住宅を津波で壊された職員も懸命に仕事をしています。また、建設業者で瓦礫処



安堵感に包まれた最終日

理をするトラックの運転手さんも被災して、「日中支援物資をもらう列に並べない。みんなのために働いているのに支援物資も受取れない・・・」と建設課に苦情を言っていました。これに代表されるように、被災はしているが何とか自宅で過ごしている方には支援の手が届きにくい状況がありました。

大災害の中でこうした歪みは様々に表れていました。

被災後一年を振り返り派遣職員として市民の皆さんに伝えたいことは、
①自分の身は先ず自分で守る。
②役所が機能しなくなると復旧は大きく遅れる。

継続的な支援の必要性

健康増進課 栗田裕子

災害発生時における的確な行動を学習することが必要だと思います。『人の力で天災を防ぐことはできませんが減災はできます。』

12月1日から2週間、山田町の包括支援センターで介護予防教室の運営と生活不活発病の調査訪問を行いました。

調査訪問では実態把握をするだけでなく、生活不活発病について周知を行い、簡単な体操や介護保険制度について紹介することもありました。訪問者の中には病院が被災し受診が中断した人や、環境の変化で閉じこもりがちになった人もいました。また津波を思い出して眠れない人もおり、震災から9か月経過しても健康を害する人が多く、心のケアや継続的な支援の必要性を感じました。

私がとても印象に残ったのは、甚大な被害を受けたにもかかわらず、町の人たちがいつも笑顔で前向きだったことです。12月には瓦礫は集められ、町にはスパーや衣料品



介護予防教室に参加する地元の人たち

店、食堂等が仮設で再開し、様々な催し物も行われ、多くの人が頑張っている姿に力強さを感じました。

また町の人や役場の人が常に私たちを気遣って、親切にしてくれました。「寒いのに遠くまで来てくれてありがとう。」と言われ心が温まる思いがしました。辛い状況でも相手を思いやる気持ちの大切さを教えていただきました。

最近被災地の状況を耳にする機会が減ってきています。しかし今もなお被災地では継続的な支援を必要としています。復興に向けて頑張っている姿を忘れずに今後も被災地のためにできることを考え、協力していきたいと思っています。

③伊豆縦貫道は早期に完成された方が良い。その他様々なことを見聞きして感じましたが、この3点は最も感じたことでした。被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

被災地に学ぶこと

観光交流課 田中秀志

私は9月15日から24日の間、岩手県山田町で義援金の申請受付や、2か月後の図書館開設に向けた準備のお手伝いをしてきました。

震災発生から半年が過ぎた町の状況は、被災した場所のがれき等は片付けられ、損壊を免れた一部の建物と基礎だけが残っている状態で、信号・街灯はいまだに整備されておらず、日中は日本各地より応援にきた警察官が交通整理を行っている状態でした。

一方、水産会社や店舗などが徐々に再開しており、一歩一歩にも満たない早さかもし



役場内での対応

れませんが、確実に復興に向かって力を感じることができている状態もありました。現地の方に「津波でんでんこ」という言葉を教えて頂きました。津波のときは、一人一人が自分の命を守るためだけに行動しなさいという教訓です。実際、今回の震災でもお年寄りを助けに行った方や子供を迎えに行った方が被害者となった例が多くあり、重みのある言葉だと感じました。しかし、その教訓も十分な対策・備えがあった上で成り立つものではないでしょうか。この言葉が伝えられ、普段から津波避難訓練を定期的に行っていた地域ですら人的被害は甚大でした。

下田市においても安全な避難場所や避難経路の確保、徹底した避難訓練の実施により

被災地派遣から

見えてきたもの

税務課 渥美大介

私は、静岡県の災害派遣チームの一員として、8月16日からの10日間岩手県山田町に派遣され、主に住民基本台帳の再整備に携わりました。

山田町が管理する住民基本台帳は、幸いなことに災害を免れ無事でしたが、大津波により住家を奪われ、親戚又は知人宅、仮設住宅に身を寄せざるを得ない状況となった多くの住民の現居所を把握することは困難を極めました。

構成員を失った地縁コミュニティの崩壊は、地域システムを成り立たせなくさせ、復興の足かせになっていました。そこで、私たちはバラバラになったコミュニティを再生させるため、人々の居住状況を調査し、取りまとめる作業に従事しました。

東北地方は、歴史的に三陸沖を震源とする大規模な地震、それに伴う津波に幾度となく見舞われており、山田町には「この石碑より下に家を建ててはいけない」と被災の教訓を記した石碑が遺されています。



静岡県内から集まった仲間

今回の大津波でも、この石碑より低地の地域は再び災禍に見舞われ、石碑が建つ場所より高台は被害を免れていました。このことは、過去の教訓を生かすことの大切さを如実に示しています。私たちの下田もかつて想像を絶するような津波の被害に遭っており、その爪痕は了仙寺などに残されています。過去の教訓を活かし減災につなげることで、災害に柔軟に対応出来る体制づくりが大切だと考えます。